

森林の荒廃が叫ばれて久しい。安い輸入材が幅をきかせ、後継者難で間伐もままならない。先人が苦勞して育てた木々をムダにせず、後世に引き継がないものか。そう考えた兵庫県加美町の山林を持つ中高年らが家を建てる人に直接、木を見てもらって販売する試みを始めた。価格は地球温暖化防止への貢献度合いに応じて設定し、環境への配慮もアピールするユニークぶりだ。(森治文)

兵庫・加美の直販制度

兵庫県のほぼ中央部に位置する加美町の丹治地区。約150軒ある人工林の一角に植えられた杉やヒノキに、直徑別に赤や青、黄色のテープが巻いてある。家直販制度をスタートさせ

たのは2年ほど前。幹の太さとともに、全体的に売りに物になるかどうかなどを調べた3千本のうち、5年間で800本を切り出す計画で、すでに約500本以上が引き取られた。「こうやって間伐されていけば、暗い森に日光が入り、残った木も成長しやすくな

った木も成長しやすくなると、元区長の広畑善策さん(66)は説明する。丹治地区では1900年ごろから植林が始まり、50年間に林業が最も盛んだった。林業のお陰で、周辺地域の中でもいち早く簡易水道が引かれるなど、暮

望者にじかに木を見てもらいたい。地区にある山に還元された金額は、これまでに計約260万円ほど。不十分だが、それでも山を維持していけると、販売制度は町全体に広がっている。制度づくりに関わった建築家や大学研究者、それに行政も巻き込んで市町村を飛び越えた「加古川流域森林資源活用検討協議会」も昨年7月に発足。加美町の例を参考に、木材の健全な流通システムの研究が始まっている。

山の木見て買って



木の成長ぶりを見つめる広畑善策さん(右)ら。購入希望者は直接、木を見て選べる。兵庫県加美町で

流通省いて低コスト あなたの家が森守る

らしくは豊かになった。しかし今は、せつかく切り出して売れたとしても、搬出コストなどを差し引くと利益はないという。間伐など森林の手入れは赤字覚悟という始末だ。かつて山に入った人たちも高齢を迎え、若者が都会に出ていくなど、林業が壊滅的な状況のなかで、地区の人たちは「もうからなくてもいい。何とか維持する方法を」と、新たな販売方法を模索。その結果、編み出したシステムが、購入希

望者に加えて、環境にいいことをしているという意識も生まれる。我々にとっても買いたたかれる心配がないのは大きい」と広畑さんは、胸を張る。「私たちの世代が何とか踏ん張り、若い人たちがまた山に戻ってくる日が来るのを期待し

たい。地区にある山に還元された金額は、これまでに計約260万円ほど。不十分だが、それでも山を維持していけると、販売制度は町全体に広がっている。制度づくりに関わった建築家や大学研究者、それに行政も巻き込んで市町村を飛び越えた「加古川流域森林資源活用検討協議会」も昨年7月に発足。加美町の例を参考に、木材の健全な流通システムの研究が始まっている。

加美町で切り出された約500本で、これまでに建った家は8棟。9棟目が兵庫県三田市で建築中だ。施主で自らも大工として金つちを握っている田中高天さん(28)はこう話す。「市場にないサイズの木材が手に入るのがあります。それに、田舎育ちの者にとって、この家が山を守っていることに役立っていると思うとうれしい。加美町の取り組みがもっと広がるように何かしていきたい」